

ニヴフ語動詞の語形成

金子 亨

1. 一般的前提と制限

1. 1. 「語形成」と語

「語形成」は、形態素が語を作る過程についての記述と理論である。

ここで「語」はL. Bloomfield 1926¹の定義

11 Def.: A minimal free form is a word.

A word is thus a form which may be uttered alone (with meaning) but cannot be analyzed into parts that may (all of them) be uttered alone (with meaning).

によってさしあたり最小自由形式としておく。

さらにこの「自由形式」を認定する原則として暫定的に服部四郎 1950²のものを援用しておいてみよう：

自由形式（付属語）認定の原則：

「原則 I: 職能や語形変化の異なる色々の自由形式につくものは自由形式（すなわち、「付属語」）である。

原則 II: ふたつの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には、その各々は自由形式である。

原則 III: 結びついた二つの形式が互いに位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である。」

1. 2. 単語・複合語・派生語

語を単語 simple(x) words、複合語 compound words、派生語 derivative (derivational) words に分けることがある。いずれも辞書形式(辞書の見出し語 lexical forms)になる。しかし単語がそのまま見出し語になるとは限らない。例えば、ニヴフ語の動詞では、過去・現在時制を表示する接辞をつけた語形を辞書項目とするのが慣習となっているので、辞書形式がすでに派生語である。また名詞も絶対格接辞のついた形式を辞書形式とするならば、これも派生形式である。このような場合、辞書形式をパラダイム内の形式のうちのひとつと決めなければならない。従って、辞書形式と単語の認定とは異なる。

単語の認定の条件は言語によって違うかもしれない。自由形式であっても、まず何が「自由」なのかを決めなくてはならない。単純に移動可能とか分割不能を基準とする訳にはいかない。例えば、ニヴフ語では、以下で見るように、動詞語幹も自由形式であるし、終止接辞のついた派生語も自由形式である。そしてその終止接辞は一つではない。そこで辞書形式にも使える自由形式を選び出す必要がある。しかしそれはあくまで自由形式のひとつであるに過ぎない。他にも単語と認定できる自由形式が存在し得るからである。

複合語は二つ以上の語が連結した形式である。すなわち複合語の構成要素のどちらも単語でなければならないはずであるが、どの構成要素も単語形式と異なる場合がある。ニヴフ語では、代名詞が動詞に接頭するとき、短縮形になる。また抱合される名詞は絶対格に限られる。さらに語幹重畳の動詞では接頭される語幹は非自由形式（＝被覆形）である。従って、この言語では動詞的複合語は存在しないことになりかねない。その存在を主張するならば、前接する要素の形態的変異に、例えば、絶対格名詞は単語形式の異形態であるというような条件をつけて、形態素複合のあり方を記述しておかななければならない。

派生語は二つ以上の形態素によって作られた語である。通例では、そのうちの一つが主要部 head を構成して、それが語幹 stem となる。派生語の構成要素は不連続 discontinuous でありえる。ニヴ

フ語でも派生語でない単語はごく少数である。動詞的単語は派生語であるのが圧倒的多数で、動詞的な派生法は形態論に収まらずに、その言語の言語構造記述の中核を占める。

1. 3. 接辞と屈折

派生語形成の形式は接辞的 *affixial* か屈折的 *inflectional* である。

接辞は前接、後接、中接、周接などの位置的な特性をもつ。言語によってこれらの接辞の種類のうちどれを好むかが違う。しかし接辞をとるのは、どれをとっても接合的 (= 膠着的 *agglutinative*) であって、派生語形成要素のうちで接辞はどんな場合も非主要部を成すとみてよい。

一方で屈折は二つ以上のカテゴリーの相関するパラダイム内部の語形変化である。語幹の内部が音声交替する場合、接辞的に主要部に接合してパラダイム要素を成す場合がある。この場合でも、同一カテゴリー内のパラダイム要素である限り、屈折と見なされる。いずれも特定のカテゴリー内部の語形変化形式であり、内部変化的 *fusional* である。ニヴフ語にはパラダイムを成す内部交替は見あたらない。ニヴフ語はもっぱら接辞的であって、どの品詞にも屈折は認められない。他動詞の語頭閉鎖音に対応する自動詞の摩擦音との関係は屈折のパラダイムと認められない。従ってニヴフ語は接辞的で非屈折的 *non-fusional* だと判断してよい。

1. 4. 語の文法

語形成は、語形成過程に関する記述と理論であるで、語の「文法」と呼ばれることがある。なぜなら、語形成のあり方には普遍的原理によって個別言語的特性が現れるからであって、その特性の多様性が普遍的原理に一定の可塑性を与える。つまり、その多様性のあり方が普遍文法の実現のありかたを顕わす。とは言っても、語形成が独自の文法であったり、文法内文法であるわけではない。それはその言語の文法システムが縮小的に投影した文法の部分であり、それはいわば、個別言語の文法のフラクタルな部分集合である。

1. 5. 制限

ニヴフ語でも語形成の問題は多くの品詞にまたがる。問題となるのは、それぞれの品詞の自由形式だけでなく、複合形式や派生形式にも及ぶ。しかしここでは多くの品詞や語群に論議を及ぼすことはしない。論議の範囲は動詞に限定する。この品詞では語形成がもっとも複雑に現れ、この言語の語形成の特性をもっともよく示すからである。

2. ニヴフ語の動詞の終止と派生

2. 1. ニヴフ語の動詞の自由形式

Pukhta 2002 (プフタ『ロシア語—ニヴフ語会話帳及びニヴフ語—ロシア語分類語彙集』)には動詞 *o3dʲ* (起きる) の自由形式の用例がある³ :

(1) *o3dʲ* (起きた) の変化

- a. 432 *ərkra pordʲ, o3ʲja* (十分寝たでしょう。起きなさい。)
- b. 435 *o3ij gerdʲ* (起きたくない。)
- c. 437 *o3nədʲ gerdʲ* (起きるのなんかいや。)
- d. 439 *rʰaimdjem o3nədʲ* (ちえ、起きるなんて。)
- e. 441 *o3ijnər kʰəmlədʲ* (起きようと思っている。)
- f. 442 *o3Go3o/ o3Ga3o* (起きなければ。)
- g. 443 *o3o3dʲ* (ずっと起きている。)
- h. 445 *o3ijnər pudidʲtʲ* (起きるようになさい。)
- i. 446 *o3Gar urra* (起きちゃったがいいよ。)
- j. 448 *o3dʲ χaga o3ra* (起きる、いいから 起きるの。)

これら用例は第一に文終始用法 A と動詞複合体成分としての用法 B とに分けることができる :

(2) 文機能別の用法

A: (__ #) 432 o3ja, 439 o3nə^d, 442 o3o3o/ o3ga3o, 443 o3o3^d, 448 o3^d, 448 o3ra

B: (__ + V) 435 o3ij, 437 o3nə^d, 441/ 445 o3ijnər, 446 o3gar

文終止用法Aの自由形式はどれも[語幹-接辞]の形式をもつ。この場合の接辞は、この文例に限ると、次の4種であり、Savjeleva/Taksami 1970⁴ (以下S/T 1970と略記)によると、それぞれ次の意味をもつ:

(3) 文終止の形

- a. -ja (432 o3ja): 単数命令 (複数形は-ve/-be)
- b. -dⁱ (443 o3o3^d, 439 o3nə^d, 448 o3^d): 過去・現在の終止
- c. -go3o/ -ga3o (442 o3o3o/ o3ga3o): 希求の終止 (3人称)
- d. -ra (448 o3ra): 確認の終止

これら終止形と動詞語幹との間に別の形態素が入っているのが二例ある。439 o3nə^dでは未来接辞-nəが、443 o3o3^dでは語幹 o3-が重複して重畳語幹が作られている例である。

文機能Bでは、別の動詞の前にたつて、後の動詞と統語関係を結んでいる動詞複合体的な形が4例ある:

(4) 動詞複合体的な形

- a. 435 o3-ij : 語幹+語幹延長接辞
- b. 437 o3-nə-dⁱ : 語幹+未来接辞+終止接辞 (=3b))
- c. 441/ 445 o3-ij-nə-r : 語幹+語幹延長接辞+未来接辞+一般副動詞接辞
- d. 446 o3-gar ; 語幹+結果態接辞 (gə^dの副動詞形<S/T 1970, p.522/523)

これらの自由形式は、Aの自由形式が文終止に現れるのとは違って、動詞連続の前要素として現れるという統語的な制約をもつ。動詞連続の要素にはいくつかの種類があるが、ここに現れているのは、動詞語幹及びその延長形、-dⁱ終止形、-r/-t副動詞の3種である。446の-garは、S/T 1970によると、gə^dの-r/-t副動詞形であるとされているので、別の類を立てないで-r/-tの類に含める。この形の文法化の度合いはまだ分からない。従って、動詞複合体の前要素(__ + V)になるのは、(4a,b,d)、つまり動詞語幹、-dⁱ終止形、-r/-t副動詞の3類である。すなわち、

(5) (__ + V) 要素の類

- a. 動詞語幹
- b. -dⁱ終止形
- c. -r/-t副動詞⁴

これらの例でとりわけ興味深いのは、435 o3ij ger^d (起きたくない) と 437 o3nə^d ger^d (起きるのなんかいや) との違いで、「したくない」の意味をもつ動詞 ger^d /ker^d が語幹に接続する場合と終止形に接続する場合 (この例では未来形) とで意味が違う点である。前者は率直な「したくない」を後者は「...するなんて (ことを) したくない」の意味をもつように見える。すなわち、ここには動詞連続の要素が語幹であるか-dⁱ終止形であるかによって意味の違いが見える。この意味の違いが一般化出来るかは定かではない。一方で、-r/-t副動詞はすべての分詞形のうちでもっとも中立的で汎用的である。それは標準的な動詞複合体 verb complex をつくる基本的要素ととみてよからう。

2. 2. 動詞派生接辞

以上の例から見える重要な点は、文終止形も動詞複合体前要素にも-nəなどの接辞がつくことであ

る。従って、一般にニヴツ語の単語自由形式は次のように作られるとみてよい：

(6) ニヴツ語の動詞の単語自由形式の構成：

[語幹 (+ 未来などの派生接辞^a) + (終止接辞)]

但し、[] は自由形式の境界

派生接辞^a は複数の派生接辞の連鎖

() はオプション、派生接辞や終止接辞のつかない自由形式も可能であることを示す。

これら動詞派生接辞はすべてオプションである。これらは次のような巡回的 recursive な語形成を行う：

(7) 巡回的動詞語幹派生規則

a. 動詞語幹 + 派生接辞^a → 動詞語幹

b. Vst + v → Vst

但し、小文字の v は派生接辞を示す。

この規則の(7b)はこの種の動詞派生規則の定義でもある。それを一般化すると次のようである：

(8) 動詞派生接辞の形式的定義

v = df v in [V + ___ = V]

動詞派生接辞の主なものとしてはアスペクト接辞 -γət-/iv(u/i)/-xə、他動詞化・使役接辞 -gu、未来接辞 -xə、モーダルな接辞 -inə、並列・慣習化接辞 (アスペクト接辞としても可) -xə/-r^ha などがある⁶。これら接続接辞について個々に述べることはこれら注記の論文に委ねて、これらの形式と概略の機能を併記して、それに略記号を与えるにとどめておく。

(9) 動詞派生接辞の主なもの

a. -γət-/iv(u/i)/-xə : アスペクト接辞 ASP(ECT)

b. -gu : 他動詞化・使役接辞 TR/CAUSE

c. -inə : モーダル接辞 MOD(AL)

d. -nə : 未来接辞 TENSE (FUT)

e. -r^ha : 慣習化 HAB(ITUAL)

この派生接辞には現れる順序がきまっている。つまり、一定の topological order がある。その順序は(10a)の括弧内のおりである。また比較的たくさんの派生接辞がついた実例を(10b)にあげる：

(10) a. 語幹 + (-γət-/iv(u/i)/-xə -gu)-nə/-inə-xə/-r^ha) + 終止接辞

b. ci maŋgo-qar^h ja:r^h lax p^h-ər^hp-γət-ku-r^ha-d^h? <Panfilov1965 II, p.78

you strong-COND why black cloud REFL-hide-CON-CAUS-HAB-FIN-QU

(お前、強いんなら、どうして黒雲に隠れてばかりいるんだ?) (太字が語幹)

このような派生接辞は日本語を含む多くの接合的 (= 膠着的) 動詞構造をもつ言語でもみられる。ただ日本語の場合は服部四郎 1950 によると「付属語」という形体的な資格を与えられているが、これはこの個別言語の文法の史的な変遷の結果なりたつに至った形態論的カテゴリーであって、先にあげた原則 I,II,III はニヴツ語には当たらない。服部的「付属語」はニヴツ語には無いのではないか。ただ、以下の(15a)文末の fora が文末助詞のようで、多分に付属語的であるが、これは倚辞・接語 clitics でもなく、自由形式の語とみなしてよいだろう。

2. 3. 文終止接辞

さてニヴフ語の動詞派生接辞がすべてオプションであるすると、この言語の動詞的自由形式、つまり動詞の単語 simple words (verb simplex) は上の(6)の連鎖から動詞派生接辞を除いた [語幹 + (終止接辞)] ということになる。つまり、語幹だけか語幹と終止接辞の連鎖との2種類だけである。しかし多くの基本的な動詞で語幹は名詞と同形であるが(例、lu (歌) : lu-d^l (歌う))、動詞語幹と同形の名詞がいつもあるとは限らないし、名詞に対応しない動詞語幹も多いので、語幹の名詞性は一般的には決められない。従って、この言語の動詞の終止形自由形式の単語は、むしろ[単語 動詞語幹 + 終止助詞]とするのが正しい:

(11) a. ニヴフ語の動詞の単語

[単語 語幹 + 終止接辞]

b. 終止接辞は次のようである:

- d^l : 過去・現在の終止
- ra : 確認の終止
- ŋa : 疑問の終止 (<(6a))
- ja : 単数命令 (複数形は-ve/-be)
- goʒo/ -gaʒo : 希求の終止 (3人称)

ここでさらに問題がある。第一に、(11b)にひとまず整理した5つの終止接辞のほかに、さらにいくつかの機能を異にする接辞がある。第二に、それらが相互に、あるいは複数接辞などと連続したりする場合がある。Pukhta 2002 からいくつかの例を拾う:

(12) a. 801 tilf-tilvə, mif kəŋŋan, utkugu palŋajnət, voput had^lgu

(毎秋、地面が凍るとき、男達は山猟に出かけるために集まったものだ。)

b. 512 cəŋ p^haŋʒ urok har had^lŋaxu?

(君たちあと何課残っているの?)

c. 1406 jagorat njaχ p^hiyrəguve

(どうか私を連れて行ってください)

(12a)には2種類の終止接辞が含まれている。第一は kəŋŋan (凍ったとき) であり、同時性を表す副文の末尾につき、その副文を主文に接続する。接続機能をもつ接辞である。これも副文の終止をマークするので、終止接辞の一種である。この種の接辞を接続接辞または副文接辞と名づけておこう。第二は主文末の had^lgu であって、動詞複合 har had^lgu の後要素である。この動詞には終止接辞 -d^l の後ろに複数表示の接辞-gu がつく。ここから終止接辞のあとにさらに複数接辞がつくことがみられる。

(12b) の har had^lŋaxu? では、第一に疑問の終止接辞 -ŋa が -d^l の後につき、その後にさらに複数接辞の -xu (-guの音便的交替形) が続く。こうしてこの文での終止接辞の順序は [-d^l + -ŋa + -gu] となる。

(12c) では p^hiyrəguve、つまり、p^h-iyrə-gu-ve (REFL-ヲ・ニ連れる-CAISE-IMP) に含まれる-guは複数接辞ではなく、使役の派生接辞 ((9)参照) である。これは語幹についている。そしてその後に命令の終止助詞がついて文が終わる。

さらに次のような場合がある:

(13) a. 1609 maŋglad^lyu səkək p^hrəd^lguda, teʒlad^hgu mangut təyərəyəd^lyuda

(強い者が先に着いてさ、弱い者が大変遅れたのさ。))

b. a. 1015 mer əgrəkom təf oʒolad^l uʒʒud^l fora

(私たち昔は家に鍵を掛けることは知らなかったからね。)

(13) a. の文では、複数接辞-gu の後にさらに確言の接辞-da (= -ta, -pa) がつく。S/T 1970 はこの異形

体のうち-ta を辞書項目にとっているもので、それに倣って、ここでも (-ta/-da) と表示する。
 また(13 b) の fora は自立性が高いと判断されて Pukhta 2002 でも分かち書きされている (S/T 1970 では接辞とされ二重ハイフンがついている)。つまり、fora は自立した文末形式とするか、あるいは(14) -ta と同じ位置にたつ終止接辞と考えるかのいずれかである。ここでは Pukhta 2002 と S/T 1970 にそって自立した語と考えて、文末の終止接辞とは考えないでおく。

以上から、この限りでの終止接辞の順序は次のようになる：

(14) [-dʲ ~ -ve/-ja + -ŋa ~ -ra + -gu + ta]

FIN IMP QU AFF PL EMP

但し、～は交替を、+は接合を表示するが、接辞の生起はすべてオプションである。

ここで次の問題は、-dʲ の交替形のレパトリーであるが、多分にモーダルな表現を作る一群の終止接辞がある：

(15) a. 442 oʒGʊʒo/ oʒGaʒo

(起きなければ) (= (1f))

b. 1103 ninjaq ŋarmaja, uyrət vinəte

(ちよっと待って、一緒にいきましょう)

c. ni nəuŋ kʰeʒnətla? < S/T 1970, 533

(僕昨日網立てしなかった。)

d. hə dəbuin nivχ nin park humiyan < S/T 1970, 523

(この家には人が一人しか住んでないんだと。)

これらの接辞はどれも動詞語幹に接合する。そのためこれらは(14) [-dʲ ~ -ve/-ja]の順位の類である。その類を列挙して(14) -dʲ ~ -ve/-ja に加えると次のようである：

(16) 終止接辞交替形

[-dʲ ~ -ve/-ja ~ -Goʒo/ -Gaʒo ~ -te ~ -tla ~ -yan]

但し、a. -dʲ (一般終止、アオリスト的時間表示)

b. -ja /-ve (命令、勧誘)

c. -Goʒo/ -Gaʒo : 希求の終止 (3人称) (= (7b))

d. -te : 勧誘 (二人称についた例) ⁷

e. -tla : 動作否定 (1人称単数と全複数につく)

f. -yan : 説明 (-yayan, -yanaなどの異形体がある)

この交替形式 (16)を(14)の終止接辞連鎖に-dʲ の縦の系列として配置すると、ニヴフ語の動詞の終止形式がどのように構成されるかが分かる。すなわち

(17) 終止接辞の配列 ((14)+(16))

(16)

(14): [$\left[\begin{array}{l} -dʲ \\ -ve /-ja \\ -Goʒo/ -Gaʒo \\ -te \\ -tla \\ -yan \end{array} \right] + \left[\begin{array}{l} -ŋa \\ -ra \end{array} \right] + \left[\begin{array}{l} -gu \\ -ta \end{array} \right]]$

2. 4. 「副動詞⁸」接辞

2. 1. で述べたように、ニヴフ語の動詞の自由形式は終止機能をもつもの A: (____#) と分詞となつて他の動詞(句)を修飾したり、動詞複合体の構成要素になるもの B: (____+V) の2種があつた。Aの用法を境界的 (terminal) あるいは終止的 final 用法、Bの用法を超境界的 (supra-terminal)、つまり後接的用法 continual と名づけておこう。境界的用法を表示するのは終止接辞であつて、その配列と要素はおまかに上の(17)のようである。

一方で、他の後接的用法は二種類のカテゴリーに分かれる。一つは動詞複合(V+V)の前要素になる場合で、中立的で一般的な接辞 -r/-t 及びその異形体をとる。他は従属接続詞的な機能をもついくつかの接辞 -ŋan, (のとき) -ivo (のあいだ), -ke (のあと), -pa (てからすぐ), -nəftox (のために) などをとる。ともに分詞形である。これら分詞の用法についてはここでは割愛して、稿を改めることにする。とりわけ、動詞複合構成の条件の問題、他の動詞形式との接続に関しては、別に論議する必要があると思われるからである。この例をいくつかあげる：

(18) a. -r/-t の例：

512 cəŋ p^həŋʒ urok har had^hŋaxu? (=12b)

(君たちあと何課残っているの?)

b. -ŋan の例：

801 tilf-tilvə, mif kəŋŋan, utkugu palŋajŋət, voput had^hgu (=12a)

(毎秋、地面が凍るとき、男達は山獵に出かけるために集まったものだ。)

c. -ivo の例：

if piləivo vesqard^h

(彼は大きくなつたら、強くなった。) <Panfilov 1965, p. 142

d. -ke の例：

ci mat^hkake əmək mud^h <同上 p.143

(君が子供の時母が死んだ。)

e. -pa の例：

p^həmək p^huba oola torr^had^h <同上 p.144

(母が出て行つたとたんに、子供が泣き出した。)

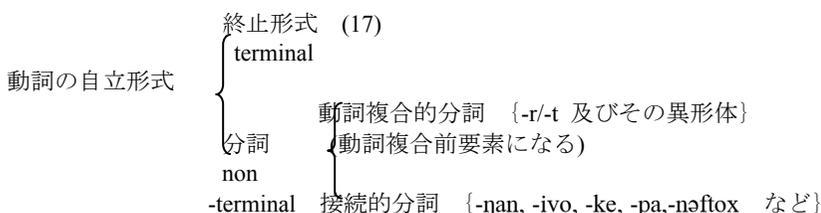
f. -nəftox の例：

vike, n^həud^h. n^həuŋan q^honəftox kərd^h. <同上 p.144

(歩いている間に暗くなった。暗くなったときに、寝るために留まった。)

ここで見るように、動詞複合体的-r/-t は同一の動詞句内の動詞複合であり、一方、分詞的な接辞では主語が違うなど、異なつた動詞句が現れる。従つて、-r/-t の分詞とその他の接続詞的分詞では動詞(句)の構成が異なる。前者は動詞複合的な構成が、後者では接続詞的な副文が作られる。この言語では、副文を導く従属接続詞という品詞はない。ここであげたような分詞のクラスがこの機能をもつ。

(19) 動詞の自立形式の2類



(他の動詞 (句) を修飾する)

ここで、それぞれの形式にその機能を対応させてみよう。まず終止形式では動詞がそこで切れて、統語構造の入力となる。この形式の機能を終止的 FIN(AL)と名づけておこう。その中身は、(15)で見たように、-dⁱ (アオリスト的時間表示)、-ja /-ve (命令)、-Goʒo/ -Gaʒo (希求 (3人称))、-te (勧誘)、-tla (動作否定)、f. -yan (説明) などである。これらをそれぞれ TENSE, IMP(ERATIVE), DES(IDERATIVE), COH(ORTATIVE), eNEG(ATIVE), REP (ORTIVE)と表示してみよう。そうすると、これまで考慮した終止的な要素 FIN は次のようにまとめることができる。

(20) 動詞終止形式の要素

FIN = {TENSE, IMP, DES, QU, EMP, COH, eNEG, REP, MOD}

次いで、分詞 PART(ICIPLE)のもつ機能は、動詞複合構成要素 CONV(VERBAL)と接続的分詞 CONJ(UNCTIVE)に分けることができる。これを次のように表そう：

(21) 分詞の2機能

PART = {CONV, CONJ}

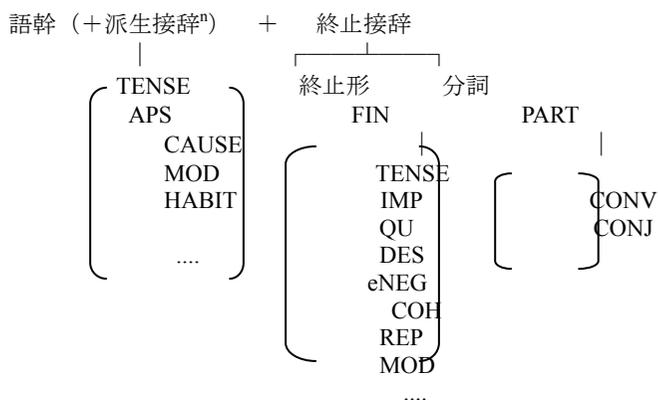
こうして動詞語末の機能は次のようにまとめることができる：

(22) 動詞語末の機能：

動詞語末の機能 { 終止形 FIN = {TENSE(AORIST), IMP, QU, DES, COH, eNEG, REP}
分詞 PART = {CONV, CONJ}

ここで動詞の語幹に続く派生接辞と終止接辞の機能を縦に並べて、交替形であることを示そう。

(23) 動詞の後接要素とその機能



この図式は、この言語の動詞が形式的にどのように形成されるか、そしてこの形式がどのような内的言語形式と結びついているかというこの言語の基本的性格の一端を示している。

3. 語幹の組成

3. 1. 代名詞の語幹前接

ニヴ語の語幹前接要素は多くはない。高橋盛孝 1942⁹はその11項「接頭詞」(p. 26)で「接頭詞は

接頭人称代名詞 (tʃ', n', pi, i) のみである」と述べている。例文は無く、括弧内の人称代名詞のうち再帰の pi の形は疑わしい。しかし動詞・名詞に接頭する要素が人称代名詞だけであるという指摘は一考に値する。ここで Puxta 2002 からこの例を拾うと次のようである：

(24) 人称代名詞縮小形の接頭

a. 1412 t^ha n̄ləʒit habe!

(わたしを通り過ぎないでください (=必ずお立ち寄りください。))

b. 1305 ni cimənəɖ^ɖra.

(私があなたに (つくって) あげる。)

c. 1104 ecpo dəf ərk p^həlyɖ^ɖ la ?

(売店もう開いている?)

ここで問題が二つある。一つは前接代名詞の形態であり、もう一つはその機能である：

(25) 接頭要素の形態と機能

a. 動詞に接頭した nⁱ-, cⁱ-, p^h-は自立形式ではなく、拘束形式である。(それぞれの自立的名詞は nⁱi, cⁱi, p^h、ただ、((19b)で Pukhta 2002 は ci- と書いている。)

b. それらは、統語的には、いずれも後続動詞の直接補語である。

三人称代名詞の接頭については問題が多い。Krejnovich 1958¹⁰は3人称代名詞的な要素 j-, i-, ʒ- (ま) が古い他動詞に接頭し明示的直接補語と交替するとして、次のような対をあげている：

(26) 3人称代名詞縮小形の接頭

a. nⁱi jaɖ^ɖ (私養った) : nⁱi qan-ard^ɖ (私犬養った)

b. nⁱi iyɖ^ɖ (私捕った) : nⁱi co-xud^ɖ (私魚捕った)

c. nⁱi əvɖ^ɖ (私もっていた) : nⁱi t^hago-vod^ɖ (私小刀もっていた)

また Pukhta 2002 に次のような例がある：

(27) 420 p^hahky pəxkit ʒnanəɖ^ɖ fora

(窓はペンキできれにしなければね)

3人称接頭ではこのように3人称接頭辞が外置き絶対格目的語と共存するという呼応関係が可能なようである。

3. 2. 名詞目的語の抱合

名詞目的語が、動詞語幹に接頭して複合語幹を作ることがある。典型的に co-ŋəŋɖ^ɖ (漁する : co魚) ŋa-ŋəŋɖ^ɖ (獵する : ŋa 獣) のような場合である。Pukhta 2002 には次のような例がある：

(28) 直接補語の接頭、本来の抱合

a. 1403 niax p^hiyret ŋəŋəŋɖ^ɖ!

(私を連れて獵に行かせてよ)

b. 605 tur xrə urɖ^ɖra. m̄xləɖ^ɖda !

(この岸辺がいい。舟付けしよう)

参考 : 602 crəɣ mu xləɖa !

(岸辺に舟を着けよう)

特に(28b)では舟 mu の語幹母音の脱落によって m- に縮約されて動詞に前接している点に注意したい。

この類の名詞抱合は生産的である。Panfilov 1965, II¹⁰ § 3- § 17はこの種の例を多くあげている。例えば、cxəv-nəd^ɗ（熊祭する）の前接 cxəf 熊は日用語ではタブーであるが、合成語で生き残ったもので、この類の典型である。

副詞が語幹に抱合されることもある。しかしこの種の抱合は少ない。

(29) 副詞の抱合

a. n'i taqi-xrod^ɗ

（私がトバ干しをした。）

b. n'i huxt hur-xrod^ɗ

（私は長衣をそこに掛けた。）

共に Panfilov 1956 § 3- § 17 から

接頭した動詞語幹は合成語主要部動詞の直接補語と見なせる場合がある。しかしこの構造条件を満足させるような動詞語幹接頭はなかなか見つからない。例えば viigerd^ɗ（行きたくない、vii-<vid^ɗ（行く）+gerd^ɗ<kerd^ɗ（拒む）、o₃ij molod^ɗ（435）（起きたくない<o₃d^ɗ 起きる+molod^ɗ いやだ）などでは接頭した語幹が後続の主要素の直接目的語である。しかしこの前要素が接頭したものか、それとも独立の補語であるかの判断はむづかしい。ここにあげたわずかの例が語幹接頭が文法化したものではなからうか。

3. 3. 動詞語幹の重畳

上にあげた事例のなかに重畳した動詞語幹の例がいくつか含まれていた。すなわち

(30) 前接的語幹重畳

a. 443 o₃o₃d^ɗ（ずっと起きている）(=(1g))

b. 1102 kaska₃ija, ci r^hatx vijvid^ɗŋa?

（こんにちわ、あんた、何処へいくところなの？）

c. 1609 maŋglad^ɗyu səkək p^hrəd^ɗguda, te₃lad^hgu mangut tə₃rə₃əd^ɗyuda

（ぐずぐずしてたんだ）

(30a) の o₃o₃d^ɗ は語幹 o₃- が単純に重複されている。o₃d^ɗ は瞬間的動作を表すはずなのだが、Pukha 2002 の口訳では重畳形は「絶えず (postoyanno) 起きている (vstayot)」となっている。間歇的（～多回的）ではなく、継続相らしい。一方、(18b) vijvid^ɗŋa? では前接された語幹は延長されている。o₃o₃d^ɗ でも o₃ijio₃d^ɗ のように語幹延長は可能のはずだが、(30a) ではそうならない。そして vijvid^ɗ でも vivid^ɗ の形が S/T 1970 に見だし語として登録されている。どうもニヴフ語の語幹重畳は単純に重複しても延長形を前接してもよいように思われる。注意すべきは、語幹が前接されることであって、後接、つまり右側に繰り返されるのではないらしいことである。これは語幹の前の位置が代名詞縮小形や被抱合要素の入る位置であることと関係するのではないか。つまり、この言語の語幹重畳は抱合操作のひとつであるように思われる。(30c) の例もこの想定を支持する。この tə₃rə₃əd^ɗyuda（ぐずぐずしてたんだ）の語幹は重畳らしいが、単形 tə₃əd^ɗ はどの辞書にも記載がない。あるいは擬態語なのかもしれない。この自動詞の語頭は tə₃ə- で、この形が重なったために、第二要素 -rə₃ə- の語頭が -t-/r-/d の語頭子音交替の規則に則って tə₃ə-+tə₃ə- → tə₃ə-+rə₃ə- となったものであろう。つまり、tə₃ə- が前接されたと考えた方がいい。

すなわち、この言語の語幹重畳は、語幹が単純形でも延長形でも前接されるという操作であると考えられる。

3. 4. 動詞化の品詞転換

次のような生態的に条件付けられた一群の語彙がある。これらは川筋を生活圏とする人々の川の中

心とした方向と運動を表す語彙である。ここでは川に関わる場所と方向に関する語彙から動詞が派生する様子がうかがえる：

(31) 景相生態的¹¹語彙の動詞化

- a. 3948 emi (岸から山の方へ) : 3947 emid^l (岸から山の方へ動く)
- b. 3949 r^hami (岸から水上へ) : 3952 r^hamid^l (岸から遠い水上にある)

- c. 3910 aqr (川下) : 3926 amd^l (川下に在る)
- d. 3911 k^heqr (川上) : 3925 k^hemd^l (川上に在る)

- e. 3945 t^hange/ t^hangi (岸から遠い水面) : t^hangid^l (岸から遠い水面へ動く)
- f. 3946 henge/ heŋgi (岸に近い水面) : :heŋgid^l (岸に近い水面を動く)

また Pukhta 2002 は次のような漁労語彙をあげている。このうち(25a)が漁労の総称で、(32b~e)では漁労手段が名詞で前接して、動詞語尾がつく。(32f) の rind- は分からない。ついでながら、(32g,h,i) は、おそらく転意的なのだろうが、不思議な語彙である。

(32) 生態的漁労語彙

- a. 701 coŋəŋd^l (魚をとる)
- b. 703 k^heʒd^l (網をしかける・網をしかけて魚を捕る)
- c. 704 taxtd^l (網で魚をとる)
- d. 705 lərkud^l (浮き網で魚をとる)
- e. 711 k^herqod^l (魚を釣り針で釣る)
- f. 702 rindid^l (氷下釣りする)

- g. 708 jilyud^l (流水後帰るように漁に行く)
- h. 709 k^həpt^l (流水の張っている間に帰るように漁に行く)
- i. 710 mu vəyit^l (流水上で魚をとる(「船を引っ張る」の意味))

ほかにも品詞転換の事例は多い。Panfilov 1965 § 13— § 26 のように成分の統語関係によって分類する方法もあるかもしれない。しかしここでは抱合的前接の場合だけを有意なケースとしておく。その立場からすると、(31), (32)であげた例はどれも名詞・副詞語幹+動詞語幹という構造をもたない。名詞・副詞語幹に動詞接辞がついた派生語彙である。つまり、動詞終止接辞 -d^l が動詞化の機能を持ち、動詞のマーカーとなっている例である。品詞転換とはこのような場合に限定すべき語形成法である。

3. 5. 複合的語幹要素

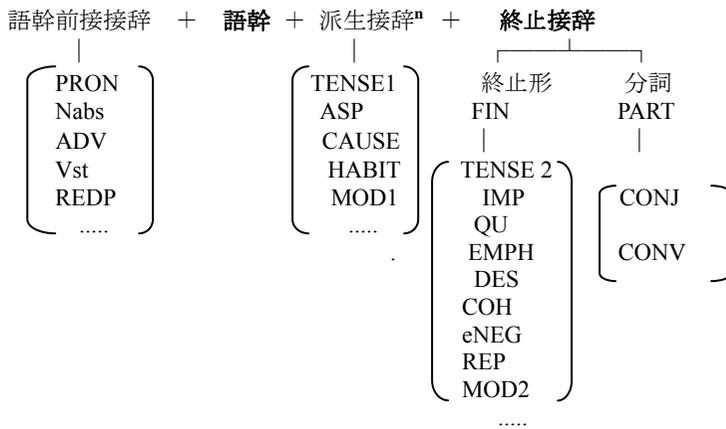
この言語で動詞語幹を非派生的に拡張する方法は、それにいくつもの種類の要素を前接することである。つまり右側には派生接辞と終止接辞が接合させるのであって、左へ接合するのは派生要素ではなく、語幹複合要素だけである。この類型的特性は他の古アジア諸語を比べると、この言語の際だった特徴になる。つまり、ニヴ語はこの意味で非常に限定的に総合的 synthetic である。ニヴ語の動詞の前接要素は上で見たような数種類に限られる。それをまとめると次のようになる：

(33) 動詞語幹前接要素

- a. 代名詞 (縮小形) PRON
 - b. 抱合された名詞絶対格 Nabs
 - c. 副詞・動詞の分詞 ADV
 - d. 他の動詞語幹 (延長形) Vst
 - e. 同じ動詞の語幹 (延長形) → 語幹重畳 REDPL
- } → 直接補語の抱合 INCORP

ここで動詞語幹重量を同一語幹の前接と考えると、この言語の前接要素は直接補語などの抱合要素だけになる。こうして動詞の単語は、[抱合要素+語幹+派生接辞+終止接辞]という連鎖からなる。この要素のうち、抱合要素は統語的な項が語幹に接合したものであり、派生接辞は[V-v]のような動詞連鎖を作る。これらの要素が終止接辞によって、アオリスト時制の終止、命令などの特定の機能をもつ終止形に後接されて長い単語を作る。この連鎖のうち、前接する要素が総合的 synthetic にみえるが、その適用範囲は直接補語またはわずかな副詞などに制限されている。一方、後接要素はすべて接合的 (=膠着的) であって、すべてオプションである。動詞の語末では、語用者の意図によって命令、勧誘などの発話様式が選択される。こうして発話の態度の表明が語末に現れる。このような動詞単語の構成を、(23)と(33)とを合成してみると、次のような図が得られる：

(34) 動詞単語の構成



この長い形態素の連鎖がニヴフ語動詞自由形式の最長形である。この連鎖のなかで、太字で示した語幹と終止接辞が自由形式成立のための必須要素であって、他のすべての形態素はオプションである。この図式にはいくつかの問題がある。それらについては個々に次項で考える。

4. ニヴフ語の語形成の特徴

4. 1. ニヴフ語の TENSE

ニヴフ語の時制が原則として絶対時制 *les temps absolus* であり¹²、それが一般的・現在・過去を示すアオリスト的時制 (-dʰ) と未来のコトを示す時制 (-nə) との二つの形体の対立によって示されると考えられてきた。しかしそれらの形態素の語内の順序は(34)で見ると、-dʰ は終止接辞のクラスに含まれて、一方 -nə は派生接辞の一つである。もちろん共起することはない。

これはひょっとして派生接辞の -nə がもともとは時制の標識でなかったことを示すのかもしれない。サハリン方言にはこの形がなく、未来時制は -i であり、-nə はない。一方で、アムール方言では -i がなく、-nə に -i が合成されて MODAL の -inə (したい) になった派生接辞がある。これらの形式のどちらが古いかは分からない。これらのどの接辞も派生接辞の位置に現れる。共に終止の -dʰ との交替位置にないので、もともとは時制標識ではないかもしれない。これらは -dʰ より後出の、つまり後から文法化された、新しい時制標識であるの

かもしれない。だとすると、ニヴフ語の古い形では、終止接辞 -dʰ (サハリン方言では -d) は時制対立をもたない形式であったのかもしれない。原郷問題と関係する面白くて難しい問題のひとつである。

4. 2. MOD の二つ

(34) には MOD も派生接辞と終止接辞の両方に含まれている。MOD な派生接辞とされたのは -inə

(したい)であった。これは最も基本的なモーダルな接辞である。一方、終止接辞にもいくつかのモーダルな接辞が入っている。これらはどれも択一的である。例えば、-*goʒo* (...しなくちゃ)と-(*ə*)*te* (勧誘)とは共起しない。これらはどれも終止形の-*dʲ*との交替形であって、命令や疑問を表す終止接辞と同じように、命題的な態度 *propositional attitude* の表示であると言っていだろう。その他の終止接辞のうちでも(しようとしたが、しなかった)という否定を表す-*tla*や(...とさ)の-*yan*のような伝聞を表示する接辞はすべて語末について命題的態度を表示する。こうしてみると、ニヴフ語のいわゆるモーダルな接辞はをさしあたり心情的表現と命題的態度との二つに分けて、この2種のモーダルのうち、一方、つまり-*inə*は心情を表す派生形式で、他方が命題的態度を表す終止接辞として語末に配置されるのだと考えていだろう。

4. 3. 否定の接辞 -*tla* など

-*tla*/*rla* (-*t*/*-r*-の交替は人称に依存する。-*t*-は1人称単数と全人称の複数について、-*r*-はその他の人称)は「しない・しなかった」の意味をもつ終止接辞で、それに前接する動詞の意味の不成立を表す。ニヴフ語には否定表現がさまざまにある。動詞、副詞、接辞などさまざまな語類にまたがって、その意味も多様である。そのうちのいくつかを以下にあげてみよう：

(35) a. *qʰaukra/qʰaudʲra*

(いいえ)

b. 224 *pilangu qʰauŋan, monʲvos qʰaudʲra*

(お年寄りがいなければ、知恵もないんだよ。)

c. *ətək nara pɾədoχ qʰaudʲ* S/T 1970

(父はまだ来なかった。)

d. 1401 *qolafti ləhət yumbe*

(病をもたないでいてください)

e. 435 *ozij gerdʲ*

(起きたくない)

f. 1015 *mer əyrkom təf oʒoladʲ iyʒdʲ fora*

(私たち昔は家に鍵掛けるなんて知らなかったね。)

g. 1417 *tʰa mujnəya, kaskaʒir hymiya*

(病気をせずに健康でいてください。)

h. *erχ vijra* S/T 1970

(彼のところに行くんじゃない。)

i. *inŋ nʲuŋ ŋarmanətla* S/T 1970

(あの人達はあんたを待っていないだろう。)

qʰaudʲ (35a,b,c) はニヴフ語の基本的な否定動詞である。それは(35a)のように返事にも使われる。この動詞は否定される動詞の語幹を向格にして支配するとおいう統語法をもっている。この例では *pɾədoχ* < *pɾədʲ/pʰrʰədʲ* が向格の項になっている。(35d,e,f)の *ləhədʲ*, *gerdʲ*, *iyʒdʲ* はそれぞれ(もたない、たくない、知らない)の意味をもつ否定動詞である。いずれもその前に否定対象の動詞を語幹、終止形しておく。(35g,h)の否定命令の形式で、*tʰa* は文頭に立ち、禁止されるべき事態は命令形で表される。語形は命令で、それを含む文は禁止の文になる。-*ira*は禁止の終止接辞である。一方で、(35i)の-*tla*は否定の終止接辞である。これらの3種が動詞ではない否定形式である。

ここで、いくつか分からない問題がある。第一に、*qʰaudʲ* は非存在、不所有、否定のどれにも使われる一般的な否定形式であると考えてもよい。しかし非存在、不所有の場合は、そのままの語形だが、先行する動詞を否定するときには、それは向格になる。第二に、(35d,e,f) *ləhədʲ*, *gerdʲ*, *iyʒdʲ* について母語話者は否定動詞だと意識しているのだろうか？この質問をロシア語で聞くのはそれだけでむしろ干渉が起きそうで、その聞き取りをまだしていないのだが、例えば、*ləhədʲ*: *jevdʲ*、*gerdʲ*: *yagonʲdʲ*、

iy3d^l : jimd^lの対をとって否定：肯定の概念が現れるかどうかは疑わしい。第三に、-t^ha は禁止とは言い難い。後に続く動詞は命令形なので、t^ha 自身は命令マイナス禁止、つまり否定だけである。この形は命令形にしかつかないので、命令形の否定であることになる。この否定語は文頭にたつ。つまり強い命題性をもっている。それだけに、この否定表現の意識がどうであるのかを母語話者に聞いてみる必要がある。

(35h) の-jraと(35i)の-tla は共に終止形でそれぞれ禁止と否定である。これらの語では語幹が否定の意味を持っているのではなく、これらの終止接辞によって語+派生接辞の意味が否定される。つまり命題の否定である。このことを表示したのが eNEGという略号であった。

4. 4. 複数表示

上の例(12a,b) と(13a)には複数をあらわす-gu/-xu が含まれていた。それが現れる位置はそれぞれに-d^l、-ŋa ~-ra の後、-d^l と-ta/-da との間である。そしてその順序は(14)のとおりである。

接辞 -gu はもともと名詞的なカテゴリーで、可算名詞の複数にきまつてつく。つまり、モノが複数であると表示するときにはこの接辞を付けなくては行けない。そして主語が複数のとき主動詞には終止接辞のあとに複数標識-gu がつくことが原則である。ネクラソフカなどで使われているすぐれた教材^{1,3}には次のような文が含まれている：

- (36) a. olagu diktant rayud^lyu. Poletjeva p.10
(子供達は書き取りを書く。)
- b. k^hləux ytkuoglaxe umguoglage vid^lyu. Poletjeva p.15
(道路を子供のお父さんと子供のお母さんが歩いていった。)
- c. oglagu nənə^d malgo^dra. Poletjeva p.4
(子供達は動き回った。)
- d. yə, n^ləŋ namagut nət^had^l. Poletjeva p.7
(はい、僕たちはよくやっています。)
- e. ŋaŋəŋ-nivxgu yə daysku namad^l. Poletjeva p.37
(猟師の人たちはこの足跡に気づいた。)

(36a) では主語名詞と動詞に複数標識がついている。(36b)では共格-xe/ge で結ばれた主語名詞が複数あつかいになって、それに応じて主動詞が複数表示である。ところが(36c)では主語名詞に複数表示があつて、主動詞にはそれがない。また(36d)では主語は複数代名詞形であるのに、主動詞は複数表示ではない。同様に(36)でも主語名詞に複数表示があつて、主動詞は複数表示をもたない。

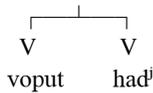
このことから、複数標識 -gu には名詞と動詞との間に形式的な一致がないことが分かる。では動詞の複数表示はオプションであるかということ、そうでもなさそうで、全体が一緒に行動しているときには複数表示になることが多いように見える。この判別にはまた母語話者によく聞いてみなければならない。ここでの例では -gu のおかれる順序については何も読み取れないが、その他の多くの例によっても-d^l の後の -ŋa, -ra のさらに後で、-ta/-da の前であることを示す例があるので(12a,b)、それに従う。この複数接辞の現れ方、そのときどきの意味の違い、それに順序については、さしあたり以上のことしか分からない。

4. 5. 分詞の機能

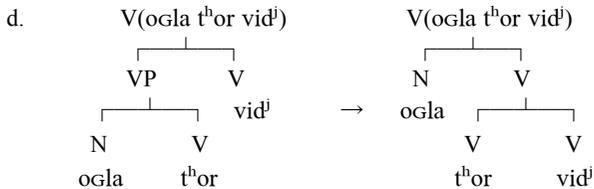
(34) 図の右端の分詞には2種類の機能があるとされた。一つは動詞複合形成要素としての、他は接続詞的な機能である。

動詞複合形成機能の例として、次の(37a,c)をあげよう。これに伝統的な句構造記述を与えるならば、(37b,d)のようである。

- (37) a. utkugu palŋajnət, voput had^lgu . (~12a)
(男達は山猟にでかけようと集まったものだ。)
- b. V(voput had^lgu)



c. if **ogla tʰor vidʃ**. S/T 1970, p.530
 (彼は子供を抱いて歩いた。)



(37b)は典型的な動詞複合の構造であり、(37d)もその構造への変形である。分詞の第二の機能 CONJ は接続的であった。さまざまな意味をもつ接続的終止接辞がこのカテゴリーに含まれる。これらが動詞と動詞句の修飾的な接続機能を果たす。つまりニヴフ語は接続詞を使わない言語、接続詞という品詞をもたない言語である。副文(=従属文)は接続詞をもつ文の連続によってではなく、分詞付きの動詞の単語で表される。副文ではなく「副語」であると言えよう。この構造では(37d)のような「変形」は起こらない。その構造は(37d)のように VP のままであると考えてよからう。

4. 6. 部分総合性

上に見たように、ニヴフ語動詞の基本構造は、[前接要素+語幹+派生接辞+終止接辞] の連鎖からなる。これらの要素のもつ語形成上の役割についていくつかのコメントが必要であろう。

(1) まず終止接辞の一つの役割は、動詞語末にたつて、動詞表現がどのような意図で使われたかを示す。これを上では確認・命令・疑問・強調などの機能としたが、これらは一括するならば、動詞表現のもつ命題的態度 *propositional attitudes* の表示と言ってよからう。

終止接辞のもう一つの役割は、動詞が分詞として用いられ、後続する動詞とともに複合的な動詞句を作るために用いられるという機能である。これをまとめて動詞句形成の機能と表しておこう。この機能は(34)の示すように、動詞複合 CONV か動詞的接続 CONJ かに分かれる。この区別はさしあたり動詞語形の連結部に副詞などの語が挿入可能であるかどうかによって決まると考えておく。この区別の詳細は論を別にしなければならない。

ここで未解決の問題が二つある。ひとつは右端の接辞-ta/-da と他の命題的態度の表示との関係である。この接辞も命題的態度に含まれると思われるが、複数接辞-gu/-ku/-xu との前後関係ははっきりしない。動詞への複数接辞が義務的ではないことは4. 5に示したが、この終止接辞を他のクラスに一括してよいかどうか、はっきりしたことは分らない。

(2) 派生接辞は助動詞的 *auxiliary* である。それはアスペクト、使役、モーダルを表示するという点でも他の多くの言語の動詞のカテゴリーに対応する。ここで問題がある。この接辞は動詞的なのか、それとも終助詞である疑問の-ŋa のように「ただのマーカ」なのだろうか。第一に、これら派生接辞はかならず動詞語幹または他の派生接辞に接続する。つまり部分的に動詞語幹に直継して合成的な動詞語幹を作る。第二に、動詞語幹と同じように終止接辞または他の派生接辞には前接する。この点でも動詞語幹的である。したがって、派生接辞は限定的に動詞的であると見てよい。この点が終止接辞と違う。そこで終止接辞を小文字の **v** で表してみよう。そうすると動詞語幹と派生接辞の結合は **V + v** で表され、それが巡回的recursiveに **V** となるから、この結合は次のような構成規則で表示できる：

- (38) a. $V + \mathbf{v} = V$ (巡回規則)
 b. (句構造 PSG 的表示)

これは緊密な動詞複合、つまり動詞複合体 **verb complex** 形成のための典型的な巡回規則である。したがって派生接辞は動詞的で動詞複合体形成にあずかる形式であると考えてよい。

(3) ニヴフ語の動詞語形のただ一つの前接要素は抱合的 **incorporative** である。前接要素は動詞の直接目的語とわずかの副詞に限られる。そこが他の古アジア諸語の動詞語幹前接とこの言語が大きく違っているところである。しかしこの言語が非常に限定的な抱合的前接要素をもつことを見ると、この言語がまったく接合的(=膠着的)であるとは言えない。一方で、動詞語幹へ接合する要素の大多数が右向きの接辞であることからすれば、この言語が複総合的 **polysynthetic** であるとは言えない。つまりニヴフ語は限定的に総合的 **synthetic** であると見なすべきだろう。これはこの言語の古アジア諸語群のなかでの位置、とりわけ北方にユカギール語、西方にトゥングース諸語、南方にアイヌ語の間にあるという位置と関係するのかもしれない。

(4) いわゆるスロット性について議論が行われたことがある。接辞要素の順序が決まっいて且つその生起が任意である場合をスロット的であると言ったのであるが、この考えと主張には疑問がある。ニヴフ語の動詞語形内部の接辞の順序についてはいまのところ少なくとも次のことが言える。

(39) a) 抱合要素は語幹直前

- b) 派生接辞の順序は (10) のようである。但し、アスペクトと使役の順序が変わることはあるが、それは意味を変える。
- c) 終止接辞の順序は(14) のようである。但し、**-ta/-da** が **-d^h~ -ve~ -ŋa** などの前に立ったり、これらと入れ替わることはない。**-gu** の順序については4. 5で述べたように問題がある。

従って、ニヴフ語動詞接辞などの順序は原則的に確定している。

(5) 抱合や接辞の順序が原則的に確定していること、つまりいわゆるスロット性は一般に統語的要素の語順配列とパラレルである。動詞語形内部の接合要素の語順は統語的であると考えられる。言い換えると、動詞の統語関係の最大投射の文法がこの言語の接合要素にも働くと考えられる。ここに「語の文法」と言われるものの意味がある。ただ語の内部ではその接合要素の結合における横並びの順序が緊密に見えるだけである。むしろ問題は、統語関係にあつて語形内部に入り込まない要素が何か、それは何かかであつて、これは統語構造の類型を決める要因のひとつであろう。しかしこの問題はここで問題にしたニヴフ語動詞語形内部要素の問題を超えるので、稿を改めることにする。

4. 8. ニヴフ語動詞内部の要素結合の性向

以上に見たように、ニヴフ語の動詞語形は内部要素を選択してそれを横並びに配列するにあつてこの言語に独特な規則をもっている。この規則が動詞語形を超えてニヴフ語の統語構造とどのように併行的に定式化できるかは別途に考えることにする。しかし、この横並びの配列 **topological ordering** は、もともと言語表現の本性なので、この **syntagma** 的な性格はこの言語の本性の現れであると見なしてよかろう。例えば、こまかいことをあげるならば、語幹に前接する抱合要素は名詞絶対格という非特定要素語幹だけでなく、特定要素である人称代名詞・再帰代名詞の縮小形を含むこと、また終止接辞には文終の止交替要素だけでなく、さらにそのあとに **fora** や **-ta/-da** などのモーダルな後続要素を含むなどが立ち得ることなどの特徴が見られる。これらはどれもこの言語の一般的特性の一部なのであろう。一般に要素の選択と配置とは言語のもつ数学的操作の基本であるので、そのためにどういふ規則を使うかは当該言語の本性に深く関わる。上で見てきたような選択と配列のあり方はニヴフ語の数学的趣向を表していると思ふことができよう。そしてそれをこの言語と古くからつきあひのあつたはずの他の隣接諸言語の性質と比べてみるならば、このユーラシア大陸の東端でどのような思考が行われてきたのかを知るひとつの手がかりになるかもしれない。

註

1. Bloomfield, L., 1926: A set of postulates for the science of language. Lg.2-153-64
in: Joos, M.(ed.): Readings in Linguistics I. 1957 pp.26-31
 2. 服部四郎 1950: 付属語と附属形式。『言語研究』15号、『言語学の方法』1960に補遺採録 pp.461-493
 3. プフタ, M. N., 『ロシア語—ニヴフ語会話帳及びニヴフ語—ロシア語分類語彙集』環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-017, 2002
 4. Савельева, В.М./Ч.М.Таксами, 1970 Нивхский-Русский Словарь. Сов. Энци. Москва
 5. ロシア語文法概念「副動詞」は、少なくとも他の言語に適用するにはふさわしくない。それは adverbial participles とも言うべき出動詞的動詞修飾形式なので、動詞複合体 (__ + V) の前要素に限らない。ここで問題になるのはさらに狭い形態・統語カテゴリーである。
 6. これら派生接辞の詳細は以下の Kaneko 文献に譲る：
 - a. Nivkh Time Expressions (1) CES No.7. 2004. 08 pp.45-68
 - b. Nivkh Time Expressions (2) CES No.8. 2005.08 . pp.1-30
 - c. A Note on CAUSE in Nivkh.CES No.9. 2006.10. pp.1-30
 - d. Conditioned Animacy Marking in Nivkh.CES No.10. 2008.03. pp.29-42
 7. S/T1970 によると、-te は-ta/-da 参照とされていて、-ta/-da (16b) は一人称単数、全人称複数について述語並列を表すとされているが、ここの-te は二人称単数に付いたもので、-ta/-da とは違うものらしい。Pukhta2002 は勧誘の表現と考えているようだ。参照、S/T1970 の1例：
oylagu luta, lerta had¹ (子供達は歌ったし、遊んだものだ)。
 8. ロシア人はロシア語伝統文法に従って、この二つを区別しないで、ともに副動詞 deprecative と名づけている。彼らには動詞複合体形成の前要素とか副文を導く要素というような文法的区別が知られていない。またニヴフ語に従属接続詞という品詞がなく、その機能は副文接辞が担っているが、副動詞というとならえ方はこの類型的特性を覆い隠すのに役立っている。
 9. 高橋盛孝 (1942): 『樺太ギリヤク語』大東亜語学叢刊 朝日新聞社昭和17年
 10. Панфилов, В.З. (I: 1961, II: 1965), Грамматика нивхского языка, АН СССР
 11. 沼田真『生態学方法論』1979 古今書房、同編『景相生態学』1996 朝倉
 12. 絶対時制とは、コト events が発話時間との関係によって決定される時間表現のことであり、Roman Jakobsen の言う les temps absolus である。これは多くの言語では実現されないが、ニヴフ語では原則的に実現されているという (Jakobsen, R., Langues Palé o-sibériennes, in *Les Langues du Monde*, 1951, pp.403-431)。Kaneko Tohru: Nivkh Time Expressions (2) in *CES* 8 (2005), pp. 1-30 を参照。
 13. Poletjeva, S.F. & Ch.M.Taksami : *Raduga* 1992 は初級教科書であるが、最初から日常表現を運用した文法的にも語用的にも非常にすぐれた教材である。
 14. 以上で見たところから、項目1にあげた一般的前提に立ち返るなら、次のような疑問が残る：もし「語」を最小自由形式とする古典的な定義によるならば、ニヴフ語の動詞の単語が(34)のような形式構造をもつのであるから、それはどのような意味で最小形式だろうか。最小の独立形式をもとめるならば、それは動詞語根であって、この長い豊かな構造は単語ではないというのだろうか。適切な大きさの構造を最小の基準に選びたいならば、いったいどの要素をとりあげよというのだろうか。いづれにせよ、「語」あるいは単語を最小の形式であるとする前世紀初頭の定義(註1)は効かない。さらにこの長いニヴフ語の単語は自由に文中を動き回るわけでもないし、どのような文要素の前後にも任意に立ち得るものではない。それは文末にたつてはじめて文法的に適格(well-formed)である。だとすれば、この単語は決して自由形式ではない。もしこの判断が妥当ならば、ニヴフ語の単語は自由形式ではない。つまり Bloomfield の定義は前半も後半も妥当ではないことになる。
- また服部四郎 1950 の原則はどうだろうか。これはもともと日本語の助詞と助動詞を接辞ではなく語にしたくてたまらないところから作り上げられた原則であったろう。しかしニヴフ語の派生接辞のカテゴリーのいくつかをなんとかして語にしようとしても無理である。そのため、この原則をニヴフ語に当てはめようとするのは徒勞である。所詮、この原則は個別言語日本語にやっと適応できる個別的判断基準に過ぎないのだろう。